

都市化の経済学(上)

ハーシュ著

喜多登

里見常吉

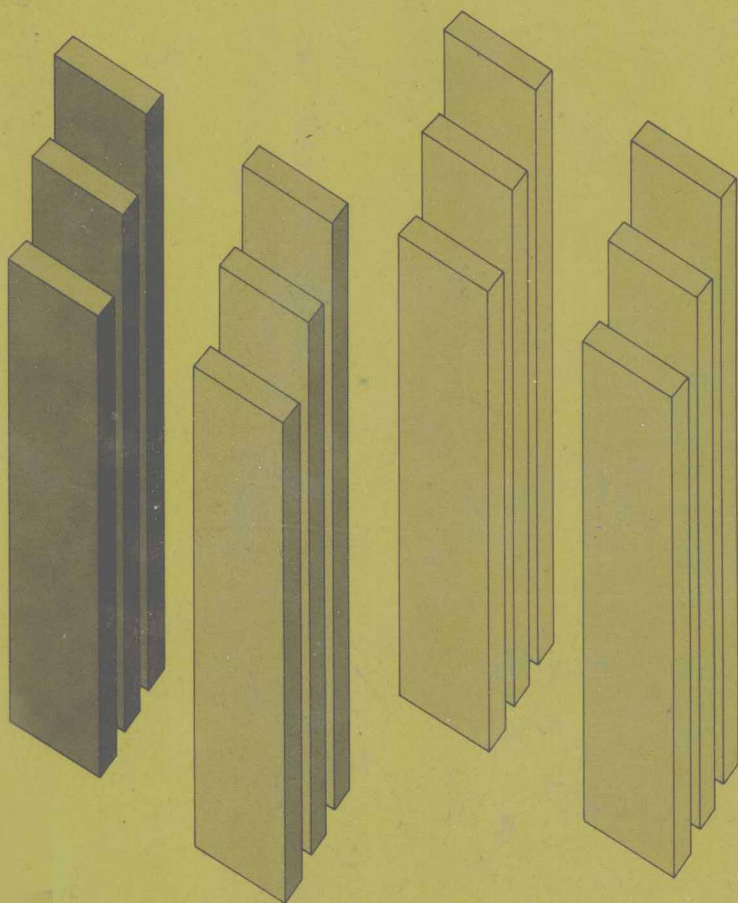
中村文隆

石川祐三

池宮城秀正

安田信之助

訳



都市化の経済学

(上)

W. Z. ハーシュ著

監訳 喜多 登

共訳 里見 常吉

中村 文隆

石川 祐三

池宮城秀正

安田信之助

訳者紹介

喜多 登

1927年 北海道に生まれる
1955年 明治大学大学院修士課程修了
現在 明治大学教授(経博)
専攻 財政学
著書 「地域と財政」白桃書房, 1972年
「財政学」(3) 有斐閣, 1970年(編著)
「地方財政入門」有斐閣, 1978年(共著)

里見常吉

1942年 東京都に生まれる
1970年 明治大学大学院博士課程中退
現在 明治大学助教授
専攻 理論経済学
主要論文 「動態的寡占市場と参入条件」1971年
「産業組織論における市場成果と経済成果」
1976年
「市場形態と資源配分の基準」1971年
(以上明大『政経論叢』に掲載)

中村文隆

1945年 東京都に生まれる
1974年 明治大学大学院博士課程中退
現在 明治大学専任講師
専攻 工業政策
主要論文『発展途上国の経済と社会』(共著, 白桃書房,
1977年)
「工業化過程における技術と雇用」(明大「政
経論叢」1977年)
「低開発諸国における技術選択と技術政策」

(明大「政経論叢」1977年)

石川祐三

1947年 東京都に生まれる
1974年 明治大学大学院修士課程修了
現在 同大学院博士課程在学中
主要論文
「社会資本についての一考察」1976年
「低開発諸国の工業化について」1977年
「マレーシア投資法の変遷と狙い」1978年
(以上明大「大学院紀要」に掲載)

池宮城秀正

1948年 沖縄県に生まれる
1975年 明治大学大学院修士課程修了
現在 同大学院博士後期課程在学中
主要論文 「都市化過程とその経済的特徴」(1978年)
「エネルギー・ショックと地方財政」1979年
(以上明大「大学院紀要」に掲載)

安田信之助

1947年 鹿児島県に生まれる
1977年 明治大学大学院修士課程修了
現在 城西大学経済学部専任講師, 世界経済調査会研
究員
主要論文
「経済発展と国際資本移動」(一)『世界経済』
1977年
「イランの経済発展と開発戦略」(一)『城西経
済学会誌』1977年
「経済発展と国際資本移動」(二)『世界経済』
1978年

ハーシュ

都市化の経済学(上)

定価 2,200 円

昭和54年5月10日 初版発行 ©

〔無検印制〕監訳者 喜 多 登

発行者 川 口 央

発行所 (株)マグローヒル好学社

東京都中央区銀座 4-14-11 (七十七ビル)

〒104 京橋局私書箱281 電話03-542-8821

無断転載複製を禁ず

図書印刷(株) 印刷・製本

Copyright © 1979 by McGraw-Hill Kogakusha, Ltd.
All rights reserved. No part of this publication may
be reproduced, stored in a retrieval system, or
transmitted, in any form or by any means, electronic,
mechanical, photocopying, recording, or otherwise,
without the prior written permission of the publisher.

日本語版への序文

1973年に合衆国で最初に出版した私の著書 “Urban Economic Analysis” が、今回日本語で出版される運びになったことは、私にとって誠に欣快に存ずるとともに名誉に思うしだいである。私の喜びがとりわけ大きいのは、この翻訳が日本の財政学の領域で優れた学者によって行なわれたことである。この方は、カリフォルニア大学ロス・アンゼルス校で私と研究を共にした私のたいそう尊敬する喜多登教授である。彼は非常にすばらしい翻訳書を造り出すのにおおいに努力された方である。私はこのたいそうすばらしい仕事が出来上ったことに対して、喜多教授に深甚の敬意と御礼を申し上げる次第である。

都市経済学についての私自身の考えは、都市経済活動の外部性という視点を強調する所でおそらく最もよく要約されていると思える。私のみるところでは、多くの都市経済学者はジョン・ケイン (John Kain) の見解である。つまり、明確な研究分野として都市経済を考える唯一の理由は、それが空間的考慮を払うためである、とした彼の見解に同意するように思える。とはいっても、私は真に興味ある問題とは、どの空間次元をわれわれの関心の焦点に選んで据えるのかという疑問とかかわるといいたい。ある経済についての空間的側面に研究を進めることは、距離との関連に力点を置くことになる。それで、どこで経済活動を行ない、そしてあるいはどこに立地すべきかということにかかわるのである。このことは、つぎつぎに地域経済学の関心事項となる。これはエドガー・フーパー (Edger Hoover) の『地域分析序説 (An Introduction to Regional Analysis)』による分野であるが、…“何がどこで、そしてなぜ…そして何をという問題に要約できよう。…どこでとは、他の経済活動との関連における場所を示す。これには、近接性、集中、分散と類似性あるいは場所的形態の

不一致が含まれ、地域間といった広い意味か、そうでなければ地帯とか、近隣、場所といった用語が〔以上の〕いずれかで論議されよう”。⁽¹⁾ このことは、経済行為者間の場所と距離の強調が地域経済の特別のケースとして、あるいはその一部として都市経済を見るようになるという見方である。あらゆる点でこの見解の表明は、フーバーの著書の目次を見る際に見つけることができよう。同書の最初の9章で多様な一般の地域問題を主として取り扱い、後の3章でだけが都市問題とかかわっている。フーバーの言をかりると“都市「地域」の重要な特別ケースを取り扱う”⁽²⁾というのである。

ところで、都市経済についての空間的研究は、これまた距離のない、つまり、近接性と密集性にも力点を置くことができる。そこで、私はこのような力点が選ばれるならば、われわれの主要な関心が距離とか立地におかれる場合よりも、まったく異なったタイプの経済理論が使われなければならないという事に同意したいと思う。しかし、この論点を示す前に、意味論問題どころかそれ以上に私は問題を提起したいのだといいたい。近接性は距離〔のあるということ〕の逆以外の何ものでもないことが正しく主張されるので、われわれが力点をおく空間の2つの次元のうちの1つが都市問題の世界を見る経済学者に対して、はっきりと異なった方法であると指摘するのである。

この主張を支えるために、日本においての経験が疑いもなく証明することになるであろうが、次の主張をここで示してみたい。

(1) 都市環境は、高水準の近接性、生産の専門化〔特化〕、豊かさと技術という点でもって他のもののなかからひき合いにだされる。

(2) 都市の中の大きな近接性は、1人の経済行為者の決定が他の経済行為者の効用や生産関数に影響を与え、それは大きな公共性を含むのであるが、こうした確率を高めるのである。

(3) 高度の生産の専門化〔特化〕は、とりわけ低い情報費用のもとで、これが相互依存性の出現にさらに貢献し、望んでいない外部効果の帰着した人たちの選択を低下させるのである。こうすることによって脆弱性を高めるのである。

(1) Edgar M. Hoover, *An Introduction to Regional Economics*, (New York: Knopf, 1971), P. 3.

(2) *Ibid.*, P. 6.

(4) 広範囲にわたる豊かさの出現には、多くの外部性創出の決定がなされる。

(5) 高水準の技術は外部性の範囲を拡大する傾向にある。というのは、それ
が有効距離を短縮し多数の経済行為者に影響を与え、しかも激しく影響を与える
からである。

要するに、われわれは、都市とは外部性が豊富な場所であると結論づけるこ
とができる。これらの外部性は、多くの点でその都市の存在理由を順次形造る
のである。ロードン・ウインゴ (Lowdon Wingo) の言葉によると、……都市
においてはあらゆるものがあらゆるものに影響するのである。⁽³⁾ 都市経済に
ついてのこの考えは、E・J・ミシャン (E. J. Michan) が“…厚生経済の
広い分野内の新しい専門化の領域…”と名づけた外部性と結びつくのである。⁽⁴⁾
したがって、立地および他の空間的考慮を企業や家計の生産及び消費決定に導
入することで、都市経済をもっともっばら新古典派経済理論を修正したもの
と見るのは十分であるとはいえない。反対に、企業、個人、家計それと政府部
門間の相互依存性の浸透のために、私は1つの科学として都市経済を体系づけ
たいと考えて、その焦点の周辺に都市市場を選んで据えている。さらに、とり
わけ私の関心を住宅、輸送、労働、それと公共サービス市場に引き入れるのが、
この都市の相互依存性なのである。

このようなわけで、都市経済学の焦点は都市市場におくべきであろう。つま
り、個人企業や家計の行動に「力点を」置くよりも、都市市場内の行為者の相
互依存性やそれぞれ異なった都市市場間の相互依存性に焦点をおくべきであ
る。相互依存性や外部性の一般化に照準を合わせてみると、都市市場の集合に
ついて、これでもって企業や家計に関する理論を修正しようとするよりもむしろ、
分析の基本単位としてこの集合を選定する方がより強いように思える。最近
になるまで、大部分ミクロの経済理論は暗々裡に、所与の決定は基本的に誰
にも影響を与えるものではなく、ただその決定者自身に影響するだけである。
他の人が影響を受ける限り、その人達は適切に補償されるものと仮定されてい

(3) Lowdon Wingo, Jr., "Comment", in Werner Z. Hirsch, (ed.) *Elements of Regional Accounts*, (Baltimore: Johns Hopkins, 1964), p. 144.

(4) E. J. Mishan, "The postwar Literature on Externalties: An Interpretative Essay," *Journal of Economic Literature*, (March, 1971), p. 1.

た。ところが、都市において、きわめて頻繁に経済行為をする人のすべてが、その人の造り出す便益の限界価値を十分に確保することができるものではない。そしてまた、その人は誰かがその人達にかけた費用を常に軽減できるわけではないのである。このことが政府干渉をよぶことになるのである。

それでは、都市とは一体何なのか。上で示した見解を拡張してみると、都市とは相互に関連し、相互に依存した市場に関する動的体系であって、経済行為者の大きな密集性と専門化、それに制度上の条件の範囲内で限られた権限や資格を有する多くの政府の行なう意思決定に影響するという条件で特徴づけられる。

都市になるということは、ある地域的単位が、公私両部門において、規模の経済に影響を与えるのに十分なほどの経済活動や家計の規模を持ち、かつこれらの「地域」集中を持っていなければならない。明らかに、都市の規模と性格は都市の主要市場の規模と物的必要施設とを反映している。この逆もある。そこで、都市は都市の産業に対して作業空間、輸送や通信を配備しなければならない。都市はまた住民に対して、生活空間、リクリエーション地区、公益事業、兵站的援護、保安、その他のサービスを供給するのである。

都市の特徴として人や経済活動の集中は、接触の利益……しばしば集積の経済といわれるが……この利益の直接的結果である。このような経済は、次第に、人や経済活動のなおいっそう大きな集積を招く原因となる。輸送費や通信費に関連した距離は市場の空間的次元を形造る（つまり、企業、住居や輸送幹線の立地、同じく企業や家計の密集性の配置である）。また空間的次元は次第に輸送や通信を規定するのである。都市のこれ以外の特徴は生産の専門化〔特化〕である。というのは生産者は高度に多様化した技術者、専門職、企業家のプールの利用可能性から恩恵を受けているからである。こうした資源のおかげで、進んだ技術や資本集約が出現し、技術革新や発明が盛んになるのである。そして、巨大市場は規模の経済を保証し、都市住民の便益のために財やサービスの多様性を保証するのである。

政府の視点に立つと、都市とはたいそう入り組んだ、扱いにくい反応のない組織である。組織上からみると、都市政府は離ればなれになった部分の寄せ集めであり、たいがいが渾沌としており、そして都市全体もしくは都市地域に関

する包括的決定をする能力を欠いているのである。多くの都市政府は、いくつかの政府の重複や競争それに相接していない政治上経済上の〔問題〕境界に直面して争っている。

有効な意思決定についての相対的な能力の無さは大変重大である。というのは、都市の環境は例外的ではあるが、少なくともつぎの2つの理由で数多くの干渉を呼びこむからである。1つは外部性の浸透であり、もう1つは公共サービスに対する完全な代替財の欠除であり、またそのサービスの保存貯蔵性の欠除である。

都市とはなんであるか、それよりして都市経済とはなんであるかについて、人びとの見解は、明らかに大きな都市政策課題とはなんであるかということについての理解いかにかかってくることになる。大きな都市問題について読者の考えも省みることなく〔論を展開したが〕、本書で展開した経済分析、喜多教授によって適切に訳された本書の分析が、このような問題の解決に向けて今後整然とした研究に役立つように期待する次第である。

1979年1月

ワーナー・Z・ハーシュ

「都市化の経済学」の日本訳に当って

1. はじめに

地域と財政とのかかわりを対象にしている筆者にとっては、都市は誠に興味をそそられる存在である。ホモ・サピエンスはいつしかある空間を都市と名づける場所に創り出したし、さらにその場所を人間の活動にまつわるいろいろな次元から、自分にとって都合のよい空間次元に造りかえようとしている。この動きは都市内部にまた都市間に、そして国民経済の空間的次元に大きな影響を与えている。

人間の属性である、何かを考え、何かを創造しようとする性向は、生産活動、特に工業化に大きな力を与え、この動きは都市と名づけた空間領域をも含めて、空間的次元に影響力をおよぼしてきている。ここには有用、価値ある財と同時に悪い負の外部性をも生み出している。つまり、ロゴスを追い求める人間の性向は、善を求めながらも悪をもいつしか創り出しているといえる。

人間の属性はこのような論理文化の追求ばかりではない。パトスの世界を求めている。憩いの場、休養の場、交流の場、そして美や芸術である。論理文化追求の反作用は、逆に自然を主題にしたパトス文化を追い求めている。

都市はこの2つの人間の属性を衝突させる場であり融合させる場でもある。この際の“させる”というのは自然的帰結というよりも、現在ではむしろ誰かがある目的意識をもってさせるということになる。そこで都市は誠にとらえ難い対象物でありながら、誠に重要な実体なのである。

このため、都市の経済的側面をとらえる研究方法はなかなか開発されてこなかった。本書のワーナー・Z・ハーシュによってこの分野の研究の新展開と、これまで試みられた研究方法の総合化が行なわれたのである。

本書の日本語版が出版されるに至った経過についてふれよう。筆者が当時ハーシュ教授が研究所長であったカリフォルニア大学ロス・アンゼルス校の Institute Government and Public Affairs に客員教授として赴いた1973年春にさかのぼる。ここで筆者はハーシュ教授より本書の日本語訳を依頼されたが、当時の筆者は研究課題を持っており、その件はおことわりしておいた。その後筆者が帰国して再びハーシュ教授より本書の翻訳の依頼があり、筆者としてもこの新しい科学を是非ともわが国に紹介したいと思いここに訳出することになった。

マグロウヒル好学社の田中正昭氏には本書の出版に当って多大な尽力を得た。ここにハーシュ教授とともに厚く謝辞を申し上げる次第である。

2. ハーシュ教授，研究所そして筆者

W・Z・ハーシュ教授は現在カリフォルニア大学ロス・アンゼルス校の教授であるが、同時にサンタ・モニカのランド・コーポレーションのコンサルタント、OECDのコンサルタントを兼ねている。さらにロス・アンゼルス市やカリフォルニア州政府の重要な委員会のメンバー等々を兼ねている。彼は1963年より10年にわたり UCLA の先の研究所で所長をつとめ、これまでにいくつもの連邦政府や州政府のコンサルタントやカウンセラーをひき受けてきている。現在のこの分野での一部を紹介しよう。

California Council for Environmental and Economic Balance.

Inter-university Committee on Urban Economics.

Chairman, Economic Section of Town Hall West.

National Tax Association Tax Institute of America's Inter-governmental Relations Committee.

ハーシュ教授の専門領域はもともと政府の経済的活動を対象としたものであったが、彼の経歴が示すように政府の諸機関にかかわるようになって以来、公害、交通等々を通して、現代の大きな難題を形成している都市に次第に焦点を合わせてきている。

ここでとりあげた“Urban Economic Analysis”は彼のこれまでの幾多の論文の集積をベースにした研究成果である。ここでは、興味ある新しい研究が

つぎつぎと展開されている。本書によって今後の都市経済研究がいっそう大きく進展できるものと期待できる。

ところで筆者が赴いた UCLA の Institute Government and Public Affairs であるが、同研究所は全米的に知られた研究所で、多くの成果がここであげられている。この研究所で筆者はハーシュ教授はもとより、本書に出てくる S・ソネンブルム、J・チャップマン教授達と論議を重ねながら、楽しく1年を過ごしたのであった。本書でも紹介されるが、ソネンブルム教授はすぐれた理論を考え出している有能な学者である。若手のチャップマン教授もその線上にある。この研究所では、ベネット夫人、シュレーター夫人、ドン嬢、ニコラス嬢といった有能なオフィサー達がいて快適な研究生活を送ることができた。

私がハーシュ教授の研究に注目したのは、随分昔である。私の興味をそそったのは、彼の政府部門、特に州および地方政府部門における規模の経済であった。そのハーシュ教授の所に、都市化の進展の中で中央政府と地方政府との間の財政的連繋はどうあるのか、という課題を持って赴いたのであった。

本書の中でも、当時の研究所でこれまで行なわれた研究成果の数々がみられる。

3. 翻訳あれこれ

翻訳はやってみないとなかなかその苦しさがわからない。言葉は文化、民族、伝統、制度等の中から生まれ、時代的感覚がそこに加わっているために、同一次元内の同一国民の中では比較的容易に意思を伝達することができる。ところが、異なった文化圏を有する国民間では、一見単純な言葉にみえても概念が異なる場合もあって、意思伝達は容易ではない。

それにもかかわらず、翻訳は科学の発展には重要であってしかも地味で甚だ労力のいる仕事なのである。

例えば地域問題を取り扱うと、ただちに Area とか Region といった言葉に遭遇する。ナースの『地域経済学』を訳された笹田教授も凡例でこの訳語をいくつかあげて示されている。私は、笹田教授はたいそう立派な訳出をなさったと思う。ケース、ケースに大変な配慮がなされていることがわかる。これも

日米間における大小さまざまな言葉上の差異，概念上の差異をふまえての成果であったと思う。

本書の翻訳では、Encyclopedia Social Science にのっとり、Area は地域として取り扱っている。しかし本書では、日本と異なる行財政制度をとるアメリカ合衆国での都市の行財政、経済、社会を取り扱っているために、あまり日本では使われていない用語がでてくる。例えば、連邦政府から州・地方政府に渡す各種の交付金制度である、Tax Supplements とか Tax Credit, Tax Deduction 等である。これは連邦政府が州および地方政府に対して、連邦税の取り分を減らすことで、これらの政府の税収を増加させる方法なのである。さらにまったく異なった用語として “equivalent” unit of input の “equivalent” という言葉がある。これなどは著者の注を参考にしながら訳出したものであった。ちょっと異なったものとして Post-industrial society を意識的に工業化後の社会と訳しておいた。さらに specialization をことさらに専門化〔特化〕としてある。これは都市化の段階を考えたからである。

翻訳は制度上に差があると、適訳がむずかしい。その意味で本書の行財政制度に関するところでは、あまり見かけない用語がでてくるであろう。また本書ではコスト・ベニフィット分析手法を、わが国であまり適用されていない都市の各行政について行なわれているので、この点も従来の文献とは異なった用語がでてくることになる。

この翻訳には、有能な若手の方がたの助力を得て完成する運びになったのである。翻訳にたずさわった方がたの労に対して深甚の御礼を申したい。訳出に当っては何回も目を通したのではあるが、それでも不十分なところがあるかもしれない。それらはすべて監訳者の責任であることを付記する。

訳出に当って、適当な語を補った方が意味が通ると思われるところには〔 〕をつけて挿入した。またこの訳出に当っては、ハーシュ教授に何回かの意義や制度に関する説明を、さらに人名についてはその発音にまで労をわずらわしてしまった。この点について、ハーシュ教授に御礼の辞をここで述べる次第である。

最後に本書の出版に当って格別の御配慮をくださった、マグローヒル好学社ならびに同社の田中正昭氏に心から御礼を申し上げる次第である。

本書の訳出に当たってつぎのように配分をきめた。

喜多 登	全体の監訳，序，日本語版への序，第1章，第9章
里見 常吉	第2章，第4章
中村 文隆	第3章，第5章
石川 祐三	第6章後半，第7章，第10章，第11章
池宮城秀正	第6章前半，第8章，第12章
安田信之助	第13章

1979年2月

喜多 登

はじめに

そもそも都市は、古代オリエントに人間を保護し人間のくらし向きをよくするために創られたものであった。最初の都市住民は、苦勞して造りあげた囲み堀や防備施設を背景に、こうした保護のもとで生産や商業に従事していたのであった。やる気盛んなギリシア国家では、都市がよい生活をおし進めるためにデザインされた文化の展示場と化したのであった。ごく最近になって、都市は文化の中心の拠り所としてありながらも、次第に「いろいろなものを融け合わせる」るつぼと化し、有効な情報生産者となってきているのである。

神は田舎を創り、人は都市を造ったと云われてきている。それで、この都市の中においてこそ、人間は自分の必要とする物や希望を満足させようとする意図を持って、新しい方法並びに新しい目標、そしてサービスを考え出したり発展させたりしているのである。とはいっても、ほんのわずかの期間ではあるが、アメリカの都市は、ある意味では一種のジャングルと化してきている。それで、結局のところ時どき不効率な財やサービスの生産者となってきている。かなり前であるが、ラルフ・W・エマーソン (Ralph Waldo Emerson) が、都市とはわれわれに利害の衝突を与えるものであるとすでに規定していた。この衝突のうちのいくつかは良いものとされてきている。ところが最近になって、この衝突は暴動の形をとってきており、警察やごみ収集人のストライキ、不十分な財政資金を原因とする公共の学校の閉鎖となってきているのである。

経済学者は、何で都市の点検をするのかということや、われわれはどのようなにして都市の将来を予測することができるかということについて、また都市の公共政策に向けられるいくつかの代替案、および一体何がその重要な結論であるのかということについて、より良い知識の「開発に」大きな貢献をしなければ

ならないのである。最近になるまで、経済学者はこうした〔研究の〕いとぐちをまったくつかむことができなかった。1950年代になって〔ようやく〕、経済学者は自分の持っている重大な関心のある種の都市経済問題にふり向け始めたのである。本書はこのような努力の上に立って展開したものである。

多くの異なった方向から都市経済の研究に接近することができる。かつては2つの研究の方向がとられてきた。1つは重要な都市政策問題に焦点を当てることである。もう1つは、ちょうど都市経済が地域経済の1分野もしくは特殊ケースであるかのように論を進めて、所与の経済活動がどこで生ずるのか、なぜ生ずるのか、ということについて追求するのである。そこで、この第2番目の接近方法は、経済活動の1つの空間的側面、つまり、どこで経済活動がなされるいはいおこすべきかという、空間とか距離について焦点を当てるのである。ところが、空間的研究はまた距離のない、つまり近接性とか密接性に力点を置くのである。近接性は距離のあることの逆であることは分かっているが、都市の世界を考察する場合、経済学者の基本的な関心が距離あるいは近接性のいずれにあるかで大きな相違が生ずる。特に経済学者が先の〔研究〕タイプのうちの距離指向型研究者であるならば、その人は非常にさまざまな型の経済理論を開発し適用しようとするであろう。もしその人が近接性指向型の研究者で、とりわけ近接性をもって大きな生産の専門化〔特化〕と手を携えて進行すると考えるのであれば、この経済学者はその理論を広めていく人であろう。

本書で私が強調したいことは、都市環境が高水準の近接性、生産の専門化、豊かさ、それと技術で一般的に特徴づけられることである。都市における大きな近接性は次の可能性を高めるのである。つまり1人の経済行為者の1つの決定は、他の行為者の生産あるいは効用関数に影響を与えるであろうし、またこのようにすることで豊富な外部性を創造するということである。高度の生産の専門化、特に低い情報コストという点からみると、相互依存性の発生にいったい大きな貢献をなしている。と同時にそのことは望んでいない外部効果が帰着する人びとに対してその人達の利用する自由選択を引き下げるし、そうすることで、他の人によっておしつけられた諸条件に対して自己の脆弱性を増やすのである。さらに、やや広範囲にわたる豊かさを持つ都市地域では、多くの外部性の生産決定をなすことを保証している。一般的に高水準の技術と結びつ

いたこの事は、外部性の領域を大きく拡張する傾向を持つ。技術の一つの成果は有効距離の引き下げである。この現象は、外部性に影響される経済行為者の数とそれらの人達が影響される程度をいっそう増大させるのである。

そこで、都市とは外部性が豊かにある場所である[といえる]。そして都市とは一体何であるかを都市にさせるのが、こうした外部性のいきわたることなのである。都市は、あらゆる物があらゆる物に影響を与える場所である。それで、なにゆえに都市経済についてのこの見解がたいそう強力に外部性の重要性に対して力点を置くのかということが明らかになる。このような都市の世界を分析するに当たって、本書では空間的配慮を、外部性の考慮を含めて、企業並びに家計の生産や消費に導入することで、新古典経済学の修正を試みることにしよう。とはいっても、これはわれわれの知識の現状では誠にむずかしい試みなのである。かえって、企業、個人、家計および政府間の相互依存性の浸透と云う点で、本書は科学としての都市経済学が組み立てられたその焦点となるあたりに都市市場を置き、これを利用するのである。この考えは個人的経済行為者のなした決定の重要性を見過すわけではない。だがこの方法は、土地や家屋、輸送、労働、そして公共サービスといったような主要な都市市場について、特別な注意を払うことによるより集計的な方法で、それらを処理することが必要となる。

ところで都市経済、なにかんずく、政治的連邦主義のもとでの都市経済は、政府の決定についての性質とか質に影響するいくつかの特別の制度の条件をこれまた吟味しなければならない。大都市地域における決定は多数の関係政府によってなされ、それぞれの政府は限定された権限と資格を有しているのである。さらに、重複した行政管轄権の一般化や基本的には別々の経済及び政治上の単位を考慮に入れなければならない。

心に留めなければならないことは、都市経済が研究の未成熟の分野にあることである。それで都市経済研究には全体的に首尾一貫性をもった枠組がなく、わずかの強力な分析の方法しか現われていない。都市問題の分析についての固有の困難性は誠に大であり、本書の全体を通じてさまざまな場面で指摘されるであろう。

都市経済分析についての統合的視点を創り出そうとする私の試みにおいて、私はほとんど独占的に〔といってよい程〕アメリカの経験を引き合いに出して

きているのである。私はわずかのケース——多分あまりにも少ないが——であるが、他の国における都市状況を腹藏なく述べてきた。これはまったくやむを得ないことだが、本書に示された分析の多くはとりわけ発展した国ぐにの都市について容易に一般化されるであろうと私は思う。わが国以外の読者はそれぞれ自国の特別の条件に対して関心を持つことになるろうし、また一般化が危険となる所のケースを認めることになる。数学的な表現は最小限にしてある。とはいっても、——特にマクロ経済において——いくつかの方程式を利用することでの便利さが「利用しない」不便さに勝つと思われる箇所では、分析についてわずかだが「数学的」概念や方法をとっている。

私は、常識で必要上さまざまな課題が処理されなければならなかったその点についてバランスがとれていなかったり、「展開に」すぎ間があることは十分承知している。これは、この比較的に新しい分野に人工の手を加える状況がこれまでほとんどなされていないことによる。多くは今後に残されることになる。今後10年に行なわれる大きな都市政策を分析するには、より鋭い分析技術が発展されなければならない。「そのために」将来の活動方向に対するいくつかの提案が本書で展開されてきているというのが私の願いなのである。

本書を著わすに当って、多くの研究仲間や学生達との論義を通して多くの支援や、刺激、それに頭腦的な楽しみを得てきたのであった。こうした人達の中で最高の方は、シドニー・ソネンブルム (Sidney Sonenblum) 博士である。彼なくしては本書の展開は不可能であつたであらう。多くの発想はまず最初に、彼によって試みられ、彼はそれらを改良し斬新なものにした。その結果、本書の多くの分野で、とりわけ都市のマクロ経済フレームワークやモデルの紹介に、そしてまたミクロ経済分析の全般的構想において、私とS・ソネンブルムとの間で密接な共同研究的な成果を示すことになるのである。私は彼に深甚な感謝の意を表す次第である。

私はまたジェリー・St・デニス氏 (Jerry St. Dennis) に格別の支援を賜っている。彼は都市マクロ経済モデルの研究に、はたまた本書の題材の組み立ての手助けに有効な助力をしてくださった。ロバート・パトラー氏 (Robert Butler) は労働市場についての最初の「章」の段階での研究に助力された。またロナルド・ティーブルス氏 (Ronald Teeple) は都市輸送市場についての章で大き